

子どもの頃、私の夢はずっと「小学校の先生になること」でした。そしてもう一つ、大学生になったらやってみたいことに「山登りのクラブに入ること」がありました。

小学校教員を目指して文教大学教育学部に無事合格入学した私は、ちょうど満開の桜が美しく咲く荒川沿いの出津橋を期待とちょっぴりの不安を胸に渡ったのでした。

時計台の下の広場では様々なクラブやサークルの勧誘が繰り広げられていました。その中に赤いカッターシャツにニッカボッカというスタイルのワンダーフォーゲル部の先輩たちが満面の笑みで山の楽しさを語りつつ勧誘をしていました。体育会系の部活は初めての私は、意を決して入部を決め、部室を訪ねました。その頃のワンダーフォーゲル部の部室はサークル棟の一番奥にあり、狭い部室の中には本棚に山の雑誌、テーブルといす、そして当時はたばこを吸う先輩のための灰皿なども無造作においてあった気がします。高校とは違う大学の部室は大人の世界に足を踏み入れたようなドキドキ感がありました。そして入部したその日から私の大学生活イコール山というような日々が始まりました。もちろん、日々の授業は受けつつも放課後はトレーニングや気象、救急法の勉強、週末は山行、長期の休みごとに長めの山合宿、3年生では副主将を務めるなど、まさに山と共に過ごした大学生活と言っても過言ではありません。4年間の大学生活の中で、北は北海道から南は屋久島まで、本当にいろいろな山に仲間と登りました。島ワン、里ワンといって離島や東海自然歩道のような場所でもテントを張りました。そんなワンダーフォーゲル部の活動は私の人生の大きなターニングポイントになったと思っています。山での経験、特に厳しい自然に接したり、危険を回避するために様々な判断を求められたり、最低限の物のみで何日も野外生活を続けたり、見知らぬ場所を地図を頼りに歩いたり・・・それらは私に自立する強さを与えてくれたような気がしています。また、新しい世界に飛び込む勇気も育んでくれたと思っています。

卒業後、私は、念願の小学校教員として働き始めました。そこでもワンダーフォーゲル部での経

験が活かされることが多々ありました。が、いわゆる卒業旅行で訪れたネパールのヒマラヤトレッキングがきっかけとなり教員をしながらネパールの子どもたちを支援する NGO に所属し、何度もネパールを訪れるうち、とうとう教員を退職しボランティアとして単身ネパールに移り住むというようなこともしました。

10 代後半から 20 歳過ぎまでという最も多感な大学生活において何を経験するかということはその後の人生に大きな影響を与えることが大いにあるのではないのでしょうか。誰と出会い、何を経験していくか、経験に勝るものはありません。たとえ辛く大変なことでも、また有意義で楽しいこともすべては経験した者の身になり、それはやがて生きた知恵として役立ち、自信へと繋がっていくと私は思っています。今の大学生たち、そしてこれから入学してくる若者たちにも、恐れずに何でもやってみること、経験に勝るものなし、と伝えたいです。

最後に私が所属したワンダーフォーゲル部は少し前、部員の減少からか無くなってしまいました。あの赤いカッターシャツに山で偶然出会うことを密かに願っていましたが、それも叶わぬことになってしまったことが寂しいです。